

小島・柳原遺跡群

中堰遺跡

長電小島分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第155集として刊行いたします本書は、宅地造成工事に伴って実施した、小島・柳原遺跡群中堰遺跡に関する調査報告書であります。

調査では、弥生時代から平安時代の堅穴住居跡、溝跡、土坑とピットなどが検出され、また、古墳時代前期の周溝墓なども確認されています。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をいただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘調査に携わっていただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

令和2年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例言

- 1 本書は、開発事業長電小島分譲地造成工事に伴い、記録保存を目的として平成30年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、開発事業の主体者長野電鉄株式会社と長野市長との委託受託契約に基づき、長野市教育委員会の直轄事業として埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 調査地は長野市大字小島字岡田堰南383番外に位置する。
- 4 開発事業に伴う保護対象面積約855㎡のうち発掘調査対象面積118㎡、実質調査面積は101㎡である。
- 5 発掘調査は平成30年12月4日～12月28日に行った。
- 6 基準点測量及び遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅱ系（日本測地系2000）と日本水準原点の標高を基準としている。株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。
- 7 遺跡の略記号は「KYNS」である。調査によって得られた出土遺物および写真・図版などの諸記録は、長野市埋蔵文化財センターにて保管をしている。
- 8 遺構図は、調査区全体図と特筆される遺構について図版を掲載し、縮尺は図ごとに設定をした。
- 9 遺物実測図は、土器が接合後に全形および残存部位においておよそ1/4以上あるものを選別したが、特筆されるものについてはこれにかぎらない。
 - ・遺物実測図の縮尺は、土器が1：4、土製品が1：3、石器が1：3および1：2にて示した。
 - ・土器実測図は、断面白ぬきは土師器、黒ぬりが須恵器を示し、内面スクリーントーンは赤彩塗布を示す。

目次

序

例言

I 調査の経過	1	III 調査の成果	7
1 調査に至る経過	1	1 調査の概要	7
2 調査の経過	3	2 遺構	9
3 調査体制	4	3 遺物	14
II 遺跡周辺の環境	5	IV まとめ	17
1 遺跡の立地	5		
2 周辺の遺跡	5		

図版目次

図1 調査区位置図	1	図7 SZ1実測図	11
図2 調査地位置図	2	図8 調査区壁面断面図	12
図3 周辺遺跡位置図	6	図9 土器・土製品実測図	14
図4 調査区全体図	8	図10 石器実測図	16
図5 SB2実測図	9	図11 小島・柳原遺跡群周溝墓	18
図6 SB3・SD2実測図	9		

I 調査経過

1 調査に至る経過

調査地が所在する小島地区は、長野市の東部に位置する。田畑が広がる広大な平坦地であり、古くから宅地としても利用されており、私鉄長野電鉄長野線の沿線で柳原駅と付属中学前駅に近く、郊外型の閑静な住宅地となっている。

古くからの住宅地の一角において宅地造成工事が計画され、平成30年9月から保護協議が始まった。該当地は「周知の文化財包蔵地」である小島・柳原遺跡群の範囲内であることから、埋蔵文化財の保護に関する手続きが必要となる旨を伝え、平成30年9月19日付で文化財保護法第93条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」の提出を受けた。これに対して同月28日付30埋第2-154号にて長野市教育委員会から「発掘調査」の保護措置を指示している。これにより同年10月31日に試掘調査を行ったところ、明瞭な遺物包含層を確認したことから、開発区域の全域855㎡を保護対象とし、うち埋蔵文化財に影響のある範囲118㎡を発掘調査対象として記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。同年11月28日付で事業者と長野市教育委員会教育長との間で「埋蔵文化財の保護の関する協議書」を締結し、同月30日付で事業者と長野市長との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

発掘調査は同年12月4日から28日までの25日間実施した。整理調査は令和元年度に行い、令和2年3月に本書を刊行しすべての業務を完了した。

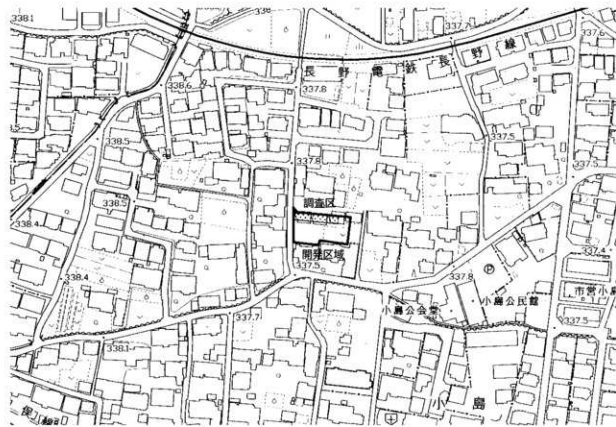


図1 調査区位置図(1:2,500)



調査地周辺航空写真



図2 調査地位置図 (1:10,000)

2 調査の経過

- 12月4日(火) 重機による表土除去作業開始。
- 5日(水) 作業員参加による調査開始。昨日の雨による泥の除去を行い検出作業。
- 6日(木) 遺構検出作業。調査区西側から遺構掘り下げ、北壁側に確認トレンチを設定。
- 7日(金) 西側のSKを中心に掘り下げ、トレンチは遺構覆土の可能性が高い。
- 10日(月) SK・ピット掘り下げ、弥生時代と平安時代遺物が混在する。SB2遺構の範囲を確定し掘り下げる。トレンチを拡張する。
- 11日(火) 北壁西側のトレンチは遺構とし、範囲を見るため東側にもトレンチを設定する。
- 12日(水) 雨のため作業中止。
- 13日(木) 遺構掘り下げ。SB2覆土中からは弥生土器及び須恵器が出土。SB3床面を検出。
- 14日(金) SB2床面を検出。SB3東側の範囲を検出し掘り下げる。
- 17日(月) 住居及び土坑完掘。午後から測量。
- 18日(火) 午前で測量図結線後に全体清掃を行い、遺構・全景写真の撮影。午後から重機による掘り下げと検出作業を行う。
- 19日(水) 作業員を増員し、下の溝状遺構の検出・掘り下げを行う。
- 20日(木) 遺構全体を検出、周溝と判断し、土層観察ベルトを3箇所設定し掘り下げる。
- 21日(金) 遺構掘り下げ。調査区南壁の清掃と分層を行う。
- 25日(火) 周溝掘り下げ。調査区南壁を写真撮影後に断面図作成を行う。
- 26日(水) 東側で周溝に切り合う溝を検出(平安時代)。土坑・ピットの検出・掘り下げ。
- 27日(木) 午前：調査区全体清掃後、空撮・個別写真撮影。午後：測量作業、道具等の片付け。作業員作業を終了する。
- 28日(金) 測量図結線。現場での作業を終了する。



表土除去作業



作業風景



検出作業(方形周溝墓)



作業風景

3 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

なお、発掘調査に伴い必要となった掘削用重機や作業員休憩所等の機材は、開発業者から現物による提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守		
調査機関	文化財課 埋蔵文化財センター	課長	小柳 仁彦		
		主幹兼所長	石田 正路		
		課長補佐	飯島 哲也		
	庶務担当	係長	小林 晴和		
		事務職員	坂戸 雅子 (平成30)		
			宮本 博夫 (令和元)		
			宮崎千鶴子		
	調査担当	係長	風間 栄一		
		主事	小林 和子		
		研究員	田中 暁徳	遠藤恵実子 (主任調査員)	
			篠井ちひろ (調査員)	清水 竜太	
			鈴木 時夫 (平成30)		
			小野 涼香 (令和元)	社本 有弥 (令和元)	

発掘調査員 山本 賢治

発掘作業員 岩井 洋芳 岡沢 貴子 金子ボンティブ 駒沢 一雄 高野 英雄
中村 泰明 峯村 茂治 山本 光洋

整理調査員 青木 善子 市川ちず子 鳥羽 徳子 武藤 信子

整理作業員 清水さゆり 西尾 千枝 待井かおる 三好 明子

遺構測量・空撮業務 株式会社 写真測図研究所

本体工事請負業者 有限会社 司建工

発掘調査にあたり、下記の方々にご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

・桜井秀雄・石丸教史 (長野県埋蔵文化財センター)

II 遺跡周辺の環境

1 遺跡の立地

中堰遺跡が位置する小島・柳原遺跡群は、長野市の東部、千曲川左岸の氾濫原で形成された自然堤防上に立地する遺跡群である。長野市内でみられる遺跡のある自然堤防地形は、自然堤防と後背湿地との差を明確にみることができるのに対して、小島・柳原遺跡群では自然堤防とその西側に広がる後背湿地との境が明確ではなく、他と異なった様相を呈している。また、千曲川の東側に位置するが、西側は裾花川伏地遺跡に接しており、裾花川の旧流路である北八幡川が入り込むなど、裾花川の影響を大きく受けている。

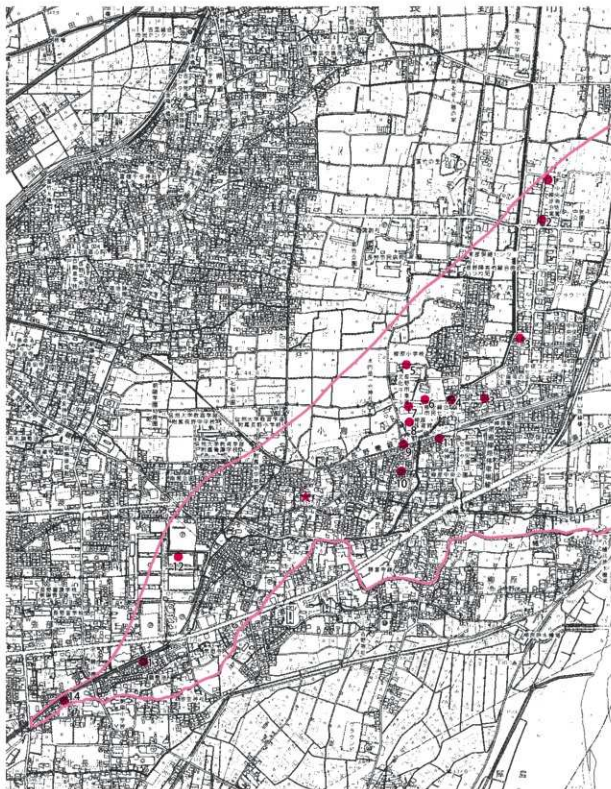
2 周辺の遺跡

小島・柳原遺跡群では、これまでに弥生時代中期から中世にかけての集落を中心とした遺構が確認されている。集落は弥生時代中期から後期の住居が最も多く確認されている。中堰遺跡（3）では50軒以上が確認されており、特に弥生時代中期が多くこの時期の中核集落とみられる。古墳時代からは弥生時代のような規模の大きな集落はみられなくなるが、小島境遺跡（12）では古墳時代前期住居5軒のうち3軒で玉造りに関わる遺物が出土していることから、玉類の生産に関わる集落であることが想定されている。これに対して平安時代になると、南川向遺跡（13）や上中島遺跡（14）といった遺跡群の西端部に小規模に位置するのみとなる。弥生時代中期から後期を中心とした集落は、自然堤防上の東から中央部付近にかけて広く展開しているが、古墳時代以降では、前期以降と平安時代の集落がこれよりも西側の遺跡群の端部に近い位置で確認されるのみとなっている。

住居に次いで多くみられるのが周溝墓であり、遺跡群内に広く分布している。水内坐一元神社遺跡（6）・中堰遺跡（4）では弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのものが造られており、弥生時代後期から古墳時代前期初頭では6～7mと10m前後の規模の4隅切れの溝を共有した形のもので、さらに水内坐一元神社遺跡では全長28m以上の前方後方形が1基造られている。水内坐一元神社遺跡から小島境遺跡にかけての広い範囲では古墳時代前期の方形周溝墓が造られており、このうち小島境遺跡は角が1ヶ所切れる形と想定され、この他は1辺の中央部に陸橋部を有する中央陸橋型と想定されている。

また、各時代での溝址も多くみられ、その性格についても明らかとなっている。水内坐一元神社遺跡（8）では弥生時代末期の環濠と考えられる二重の溝が確認されており、土器とともに農具や武器型の本製品が出土している。中でも木製盾は形状が明確であるうえ赤彩などの装飾が完全な形で復元されている。環濠については確認が一部であるため範囲などは明らかではないが、同時期の集落と方形周溝墓群も近い位置にある。また、中堰遺跡（3）の溝は弥生時代終末期から古墳時代初頭の外来系を含む多くの土器が投棄されたもので、集落域を区画する可能性が挙げられている。水内坐一元神社遺跡（7）の自然流路は、中堰遺跡（4）と合わせて大きく蛇行する形が想定され、堆積物の科学分析の結果からは弥生時代後期段階から水が流れなくなり始め、古墳時代以降河川としての機能が失われたものであることが示されている。

自然堤防上に弥生時代中期から後期にかけて展開した集落域は、弥生時代終末から古墳時代前期ではその規模は縮小するものの、環濠や玉造りに関わる集落などが想定され、さらに弥生時代中・後期の集落と同じ範囲には周溝墓が複数造られた墓域として展開している。



- 1～4 中俣道跡 (1 永楽開発支店 2 中央消防署柳原分署 3 中俣土地区画整理事業 4 市道柳原東西線)
 5～10 水内生一元道跡 (5 柳原小学校 6 市道柳原東西線 7 柳原総合市民センター 8 柳原体育館
 9 (株)山二小島団地 10 (株)山二小島団地二期・ガーデンパーク小島)
 11 宮西道跡 12 小島境道跡 13 南川向道跡 14 上中島道跡 ★ 中堰道跡

図3 周辺道跡位置図 (1 : 15,000)

Ⅲ 調査の成果

1 調査の概要

調査では弥生時代中期から平安時代までの遺構・遺物を検出した。遺構は住居2軒、溝3条、方形周溝墓1基、土坑、ピットを検出した。住居は弥生時代後期が2軒で、SB2は全体の1/2ほどの検出で、床面付近からの土器が多く、SB3は平安時代の溝（SD2）が重複することから全体の1/4ほどの検出となった。溝SD2は北側に向かって細くなり、底面からは獣骨（破片）を検出した。SD3は方形周溝墓の検出時に確認したもので周溝の東端に重複する。溝はいずれも南北方向で平安時代のものである。土坑は時期が明確なもので弥生時代後期と平安時代とがあり、住居よりも東側では弥生時代後期が多く、西側では平安時代のものとなる。なお、SB1は遺物の出土状況から遺構としたが、土層観察などから弥生～古墳時代の性格不明の掘り込みまたは落ち込みと判断した。また、遺構覆土中から縄文時代に比定される石器が2点出土している。

方形周溝墓は、住居などの検出時から調査区北側に東西方向の溝状の遺構がみられたが、判然としないうちからトレンチを入れ溝状の遺構が存在することを確認し、住居などの調査後に重機で30cmほど掘り下げて検出を行った。調査区北・西・東の3方向で溝と2箇所の内側コーナー部分を検出し、墳丘部分（調査区南側）で18m、全長約24mの方形周溝墓であることを確認した。今回確認した時期のうち、弥生時代後期は集落域、古墳時代前期は墓域として展開するが、平安時代では検出面及び遺構内からの出土が少ないことから、この時期の集落は展開しない場所であることが考えられる。

表1 遺構表

遺構名	時期	遺 構		施設・主軸・重複 ほか	個別 図版	土 器		その他 遺物 図版
		平面形 (規模m)	検出率			出土量 (g)	実測数 図版	
(SB1)	(欠番)			(落ち込み)		390	1 図9-1	
SB2 2号住居	弥生時代 後期	不整形 一×4.9	1/2	床面土器	図-5	17,840	10 図9-2~11	石蔵 図10-1
SB3 3号住居	弥生時代 後期	隅丸長方形 一×2.4	1/4	東側にSD1が重複する	図-6	1,570		
SD1 1号溝	平安時代	幅:0.35	一部	南北方向		145		
SD2 2号溝	平安時代	幅:0.32~0.96	一部	南北方向、SB3に重複 底:獣骨(片)	図-6	735		
SD3 3号溝	平安時代	幅:0.7~1.6	一部	南北方向 SDZ1に重複する	図-7	1,210		
SDZ1 方形周溝墓	古墳時代 前期	溝幅:1.9~3.0 全長:約24~25	1/6	3辺(北、西と東一部) 角(内側)2箇所	図-7	25,670	8 図9-13~20	円板 図9-25 打製石斧 図10-4
SK 1~12	弥生時代 ~平安時代	円形				3,175	1 図9-12	
Pit 1~8	弥生時代 ~平安時代	円形				246		
トレンチ				3~5(周溝墓以外)		1,280		
検出面						6,975	3 図9-21~24	石蔵 図10-2~3
合計:						59,236		

Ⅲ 調査の成果

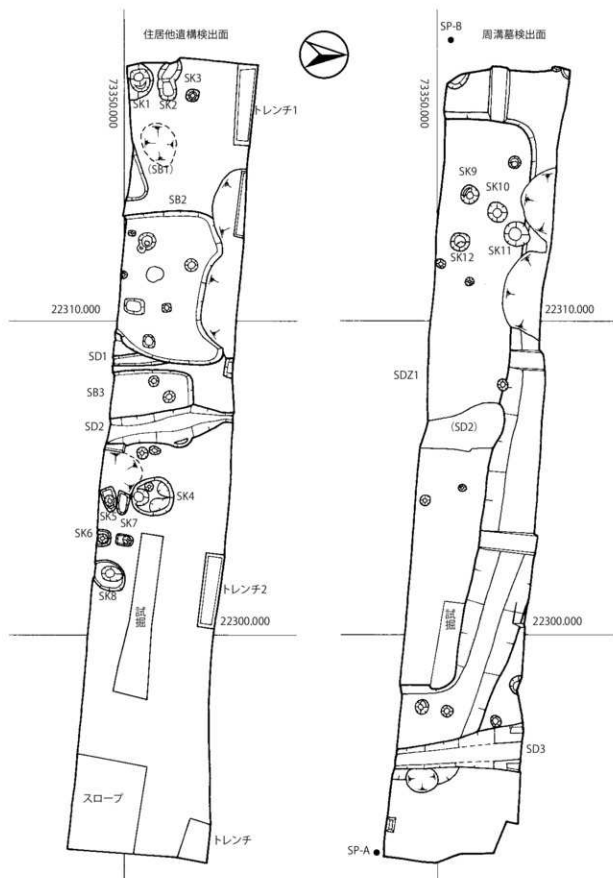


図4 調査区全体図 (1:120)

2 遺構

・SB 2

南側が調査区外に、北側が攪乱にあたるため全体の1/2ほどの検出となった。検出面から床面までの深さは20cmほど、平面形は特に東側が溝(SD 1)と重複することもあり不整形となる角の丸い方形で、壁面を検出した東西方向で4.9mを測る。覆土上面は包含層が残っていたため、他の時期の遺物がみられたが、中ほどから該当期の土器が出土し、床面にかけて比較的形の残る土器が出土した。弥生時代後期前半の遺構である。

床面は硬く締まり、全体的に明確な検出状態である。炉の確認はないが、住居西寄りの位置では土器が破片で複数個体床面に接している。遺構に伴うピットは3基で、このうち柱穴とみられるのがP-1である。

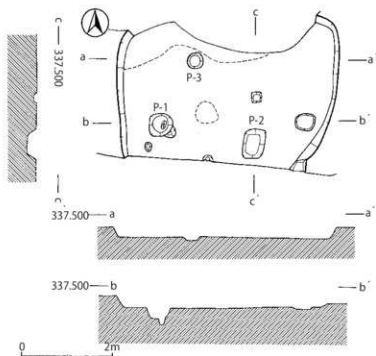


図5 SB2実測図(1:80)

・SB 3・SD 2

SB 2の東側に隣接する位置にあり、SB 3の東側にSD 1が重複している。

SB 3は南側が調査区外となり、中央から東側はほぼ全体にSD 1が重複するため隅部分のみとなり、検出は全体の1/4である。規模は東西方向で2.4mの長方形とみられる。SB 2と同じ弥生時代後期の遺構で、上面では土師器・須恵器が、遺構覆土の下半から該当期土器が出土した。

SD 2は南北方向で、SB 2の中央から東側に重複する。遺構の深さは南で40cm、北で17cmと北側に向かって上がっている。幅は南で96cm、北で32cmと細くなっていることから、北側は端部に近いものとみられる。覆土中からの土器は少ないが、底面で獣骨(破片)が出土した。時期は平安時代で調査区南壁断面からもSDZ 1と重複する位置にある同時期のSD 3同様、遺構では一番高い位置から掘り込まれている。

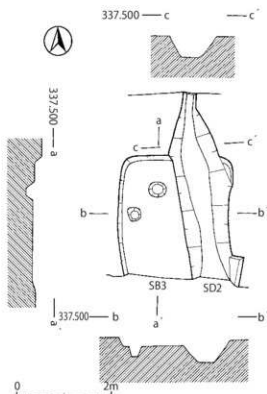


図6 SB 3・SD 2実測図(1:80)

Ⅲ 調査の成果



SB2床面土器(南西から)



SB2全景(北から)



SB3・SD2全景(北から)



住居・土坑全景(南西から)

・SDZ1

遺構の検出は、住居等を検出した面では明確な検出を行うことができず、調査区北壁側に2箇所設定したトレンチ(図4トレンチ1・2)で下に遺構が存在することを確認したことから、住居などの調査後に調査区全体を重機で掘り下げて検出を行った。遺構は調査区の中央から西寄りに位置し、北・西側は調査区外にかかることから、周溝は東側で全体を、北(東西方向)・西側(南北方向)では幅の2/1～3/1ほどを検出した。墳丘部は北側は全体を検出し、東西方向で18mを測る。なお、墳丘盛土部分の確認はなかった。

- ・規模 検出は全体の1/6ほどである。北側は溝の外側が調査区外となるが内側は全体を、西側も外側が調査区外となり、東側のみ調査区内で幅を確認することができた。よって全体としては溝3方向と内側コーナー部を北東、北西の2箇所を確認し、これにより規模は墳丘部が東西方向で18m、溝は検出ができた東側で1.9m～2m、北と西側は推定で2.5m～3mであり、溝幅は全体で1.9m～3m、周溝墓の規模は24～25mと推定される。
- ・形態 北側辺と北西・北東角では溝は切れないことから、北側以外の3辺もしくは南側の東西の1角に陸橋部があると考えられる。
- ・溝 溝の深さは、周溝墓の検出面から西側で17cm、東側で35cmであるが、調査区南壁断面(図8)からは特に西側でさらに20cmほどあったものとみられ、覆土にあたるものは2層が該当し、検出では上の層では判然とせず下の層まで掘り下げたものである。断面は南から北に向かって緩く落ち込んでいる。
- ・遺物 覆土中からは土器および石器が出土した。土器はそのほとんどが破片であり、時期は弥生時代中期から平安時代にかけてのものが混在する。遺構掘り下げの際に土層観察用のベルトを3箇所設置し土層の

確認を行ったところ、覆土は単一の黒色の土層であり、土器の出土位置などの時期による差はみられなかった。

周溝墓溝内出土土器の種別での割合は、弥生土器42%（中期22%、後期20%）、土師器56%、須恵器2%である。古墳時代を主体とした土師器が半数を占め、弥生土器は住居などの遺構がある弥生時代後期と、周辺の遺跡の状況から遺構が存在する可能性の高い中期と同じ割合となっている。土師器は細片が多いことから土器からの細かな時期の設定はできないが古墳時代が多い。なお、古墳時代以降の時期は平安時代の遺構の層位が異なることから主体的には存在しない。

・時期 土層からは弥生時代後期の遺構と同じ6層（図8）から掘り込まれ、覆土中からは弥生時代中期から古墳時代までの遺物がある。遺構の時期を判断する遺物はないが、遺構が掘り込まれた位置から弥生時代後期以降、上面の土器から古墳時代中期以前までには埋没



SDZ 1 全景（北西から）



SDZ 1 周溝ベルト断面（西から）

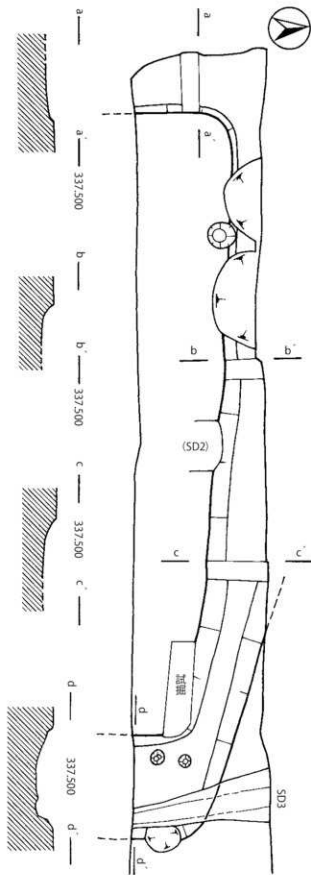


図7 SDZ 1 実測図（1：110）

Ⅲ 調査の成果

したことが考えられ、周辺の遺跡と合わせれば古墳時代前期の所産と考えられる。

・調査区南壁土層

検出した主要な遺構が調査区南壁に接していることから、南壁での土層確認を行った。

遺物がみられるのは4層からである。また弥生～古墳時代と平安時代とで遺構の掘り込み位置が異なっており、平安時代遺構は第5層から掘り込まれ、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は6層から掘り込まれている。弥生時代後期の住居の検出がはじめはつきりしなかったこと、また覆土上面から平安時代の遺物が多かったのは、検出面を平安時代遺構の位置に合わせたことから、平安時代包含層にあたる5層が残っていたことによる。またSB2覆土は基本8層土であるが、黄色砂・ブロックの層が部分的に入っている。

土層は全体的に黒色土に黄色の砂やブロック状の土が混在するが、これが上面では多く下面に行くにしたがって少なくなる。さらに、全体的に砂・土（ブロック）も上層は粒が大きく、下では細くなっていることから、遺構覆土が弥生時代後期～古墳時代、平安時代とで異なり、平安時代は黄褐色が強くややもろいのに対し、弥生・古墳時代では黒色の強いしまりのある層となる。

周溝墓は、周溝の覆土は9・10層にあたり、遺物の出土は10層が中心で、9層よりもしまりがある黒色の強い土層で、周溝は10層で一度に埋没していることが考えられる。5層に当たる面で古墳時代中期があることから、今回の調査からは、周溝は中期以前には埋没したことが想定される。



SDZ1 全景（北西から）

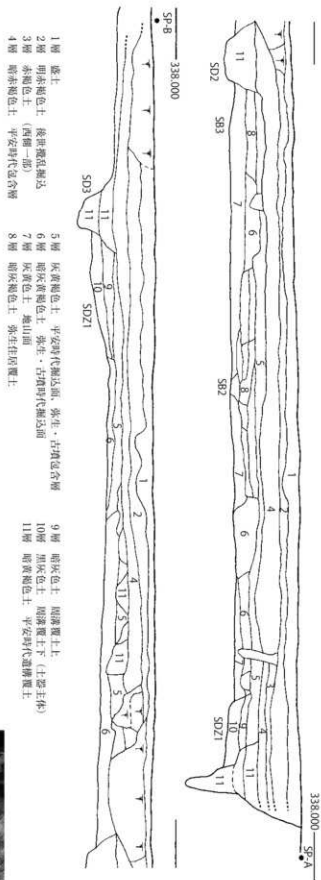


図8 調査区南壁土層図（1：60）



調査区全景 (住居ほか) (東から)



調査区全景 (住居ほか) (西から)



調査区全景 (周溝墓) (南東から)



調査区全景 (周溝墓) (東から)



調査区空撮 (周溝墓) (上=北)

3 遺物

1 土器・土製品

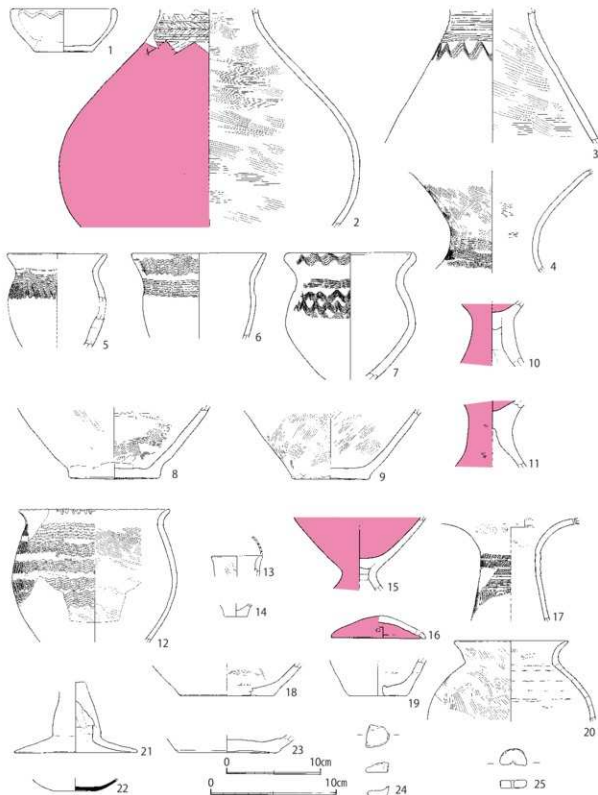


図9 土器・土製品実測図(土器1:4、土製品1:3)

・土器 (図9)

調査区全体では、弥生時代中期から平安時代までみられるが、土師器、弥生土器が多く須恵器をはじめ古墳時代以降のものは少ない。SB2は、壺(2)は赤彩で頸部はヘラ描きの斜走沈線充填鋸歯文、3はヘラ描き横線文の下に櫛描き波状文、4～7は櫛描き縷状文と波状文である。壺2と3はヘラ描きの弥生時代後期初頭吉田式の特長を持ち、特に壺・甕ともに文様が頸部のみの縷状文であることから、吉田式でも古い段階に位置する。明確な遺構は住居のみであるが、弥生時代の土器は、SDZ1出土の中期栗林式期(17)から後期箱清水式期(15・16)まで、連続して存在している。

なおSDZ1は、明確なもので弥生時代中期から古墳時代中期までみられるが、出土状況では破片が混在することから、土器によって遺構の時期を判断するには至らなかった。検出面では、須恵器杯(22)は平安時代遺構面、高杯(21)は弥生・古墳時代検出面と時期が分かれている。

・石器 (図10)

黒曜石(1)は1点のみでSB2覆土中(上層)からの出土であるが遺構には伴わない。2・3は検出面からの出土であり、いずれも大きく欠損している。完形はSDZ1出土の4のみで、このほかにも剥片や砥石などが出土しているがほとんどが破片である。

表2 土器・土製品観察表

図 番号	版 時 期	種 別	器 種	残 存 部		調 整 ・ そ の 他	出 土 遺 構	
				部 位	量		内面/外面/底部	遺 構 位 置
9	1	弥生時代後期	弥生土器	鉢	全体	1/3	口唇部縄文、ヘラ山形文	SB1 覆土
	2	弥生時代後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	1/2	赤彩、斜走沈線充填鋸歯文	SB2 床面
	3	弥生時代後期	弥生土器	壺	頸部～胴部	1/3	頸部：ヘラ横線文、波状文	SB2 覆土
	4	弥生時代後期	弥生土器	壺	頸部	2/3	縷状文・波状文	SB2 覆土
	5	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/3	縷状文+波状文	SB2 覆土
	6	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/4	波状文+縷状文	SB2 覆土
	7	弥生時代後期	弥生土器	台付甕	口縁～胴部	1/3	縷状文・波状文	SB2 覆土No5
	8	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部～底部	2/3	ハケ/ハケ-ミガキ	SB2 覆土No6
	9	弥生時代後期	弥生土器	壺	胴部～底部	1/3	ハケ/ハケ-ミガキ	SB2 覆土No3
	10	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯部～脚部	2/3	赤彩/赤彩	SB2 床面
	11	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯部～脚部	3/4	赤彩/赤彩	SB2 覆土
	12	弥生時代後期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/3	口縁：刺突、胴部：波状文	SK4 覆土
	13	弥生時代中期	弥生土器	甕	口縁～胴部	1/5	ナデ/口唇部：縄文、羽状?	SDZ1 覆土北
	14	弥生時代中期	弥生土器	ミニチュア	底部	2/3	ナデ/ミガキ	SDZ1 覆土
	15	弥生時代後期	弥生土器	高杯	杯部～脚部	1/3	赤彩/赤彩	SDZ1 覆土東口
	16	弥生時代後期	弥生土器	蓋	全体	3/4	赤彩/赤彩、縁穿孔(対2箇所)	SDZ1 覆土No5
	17	弥生時代中期	弥生土器	壺	口縁～胴部	2/3	頸部：縄文+縷状文、懸垂文	SDZ1 覆土北東
	18	弥生時代中期	弥生土器	壺	底部	1/2	ナデ/ミガキ	SDZ1 覆土No4
	19	弥生時代後期	土師器	瓶	胴部～底部	1/3	ナデ/ミガキ、穿孔中央1	SDZ1 覆土北中
	20	古墳時代中期	土師器	甕	口縁～胴部	2/3	ハケ-ナデ/ハケ	SDZ1 覆土No1
	21	古墳時代中期	土師器	高杯	脚部	2/3	黒色処理/ミガキ	検出面
	22	平安時代	須恵器	杯	底部	2/3	ロクロナデ/回転糸切	検出面
	23	古墳時代中期	土師器	甕	底部	1	ナデ/ナデ	検出面
	24	古墳時代	土師器	ミニチュア	全体	1/2	ナデ/ナデ	検出面
	25	弥生時代後期	土製品	円板	全形	1/2	中央穿孔1	SDZ1 覆土西

*残存部・量は、部位に対するの残存量を示す。

Ⅲ 調査の成果

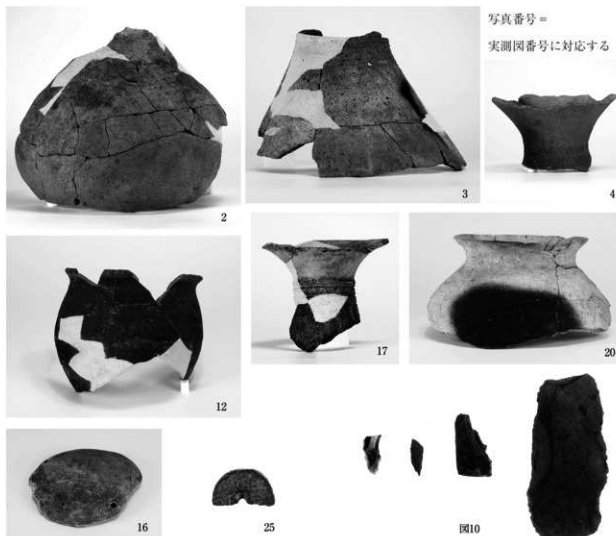
2 石器



図10 石器実測図 (1~3=1:3、3・4=1:4)

表3 石器観察表

図版 図	版 番号	時 期	種 別	器 種	残存量	重量 (g)	調 整 ・ その他	出土位置	
								遺 構	位 置
10	1	(縄文時代)	石器	石核?	1/2	2.26	黒曜石	SB 2	覆土
	2	弥生時代中期	石器	石鎌	1/4	0.31	磨製石鎌 緑色片岩	検出面	
	3	弥生時代中期	石器	磨製石斧	1/5	11.34	扁平片刃 輝緑岩	検出面	
	4	(縄文時代)	石器	打製石斧	完形	67.54	頁岩	SDZ 1	覆土



IV まとめ

調査では、弥生時代中期から平安時代の遺構・遺物を確認した。この他遺構覆土中から縄文時代に比定される石器が2点出土している。検出した遺構は、弥生時代中期の住居が2軒、古墳時代前期の方形周溝墓1基、平安時代の溝跡3条、このほか土坑・ピットで、弥生時代と平安時代とを同じ面として検出をした。住居址は調査区外にかかることから、1/2～1/4ほどの検出であったが、覆土下層から床面にかけて土器を検出した。また、溝はいずれも南北方向で、うち2条(SD2・3)は弥生時代・古墳時代の遺構を切っている。この中で古墳時代前期方形周溝墓は、住居等と同じ検出面からは判然とはせず、確認のため調査区北壁に入れたトレンチから遺構の存在を確認し、住居等の調査後に重機で掘り下げて検出を行った。周溝は、東西方向のほか調査区西壁と東側で南北方向の溝と交差する形で、東側の溝は全体を検出し、北と東側は外側が調査区外であるが、内側のコーナ一部を2箇所確認することができた。墳丘部は南側(東西方向)で18m、全体では24～25mと推定される。また、調査区南壁面では主要な遺構がかかっていることから、壁面で層序確認を行った。調査区内に後世の擾乱などが多く入ることからあまり明確ではないものの、弥生時代・古墳時代と平安時代とは異なる層から掘り込まれていることを確認した。

<小島・柳原遺跡群の周溝墓> (図11・表4)

小島・柳原遺跡群内では、これまでに複数の周溝墓が確認されている。遺跡群の東に位置する中俣遺跡から西端の小島境遺跡まであり、今回水内坐一元神社遺跡・中俣遺跡から小島境遺跡の間の空白であったところに位置する中俣遺跡で確認されたことから、広く全体に造られている様子がみられる。また、周溝墓は多くが遺跡群内では多く存在する弥生時代中期・後期の集落と同じ場所に位置している。

水内坐一元神社遺跡では四隅切れ形(1)のものが複数基溝を共有しながら位置し、前方後方形(2)は現在のところ確認されているのは1基である。3～9は溝が1周めぐり、この内の角または辺の1ヶ所に陸橋部が設けられるものと想定されるが、検出状況から小島境遺跡(8)は角に、水内坐一元神社遺跡(7)では辺の中央にあることが推定されている。

時期は、1が弥生時代後期から古墳時代初頭で一部弥生時代中期まで下ることが想定されている。このほかは溝内から出土した土器の時期や弥生時代後期住居を切って造られていることから古墳時代前期(初頭～)である。

規模は、方形のものでおおよそ10m以下(1、6、8)、13～17m(4、7)、20m(5)、25m(3)に分けられ、前方後方形は29mである。さらに遺構の方位をみると1・4～8は北西(対角線が北を向く)、3が北にややずれた東西、前方後方形2と3・9が東西方向を向いている。20mの5でもやや北西に傾いており、北方向からみて17m以下が45度、25mの4で15～16度北東に傾いている。なお、9については検出が一部で規模の判断はできなかった。以上規模と方位を合わせると、おおよそ20m以下が北西(北に対角線)、25m以上が東西方向と分類できる。1・4～8はおなじ方向で、群集墓として同じ規格のもと造られたものとみられる。この中で、東西方向である3は、墳形は同じであるが、他の周溝墓との違いはその規模であり、方位は前方後方形と同じとなっている。

以上から、小島・柳原遺跡群での周溝墓について、A：四隅切れ形、方位北西(1)、B：規模10m前後、方位が北西(北から45度)(4・6～8)、C：規模20m、方位北にずれた東西方向(5)、D：規模25m、方位ほぼ東西(3)、E：前方後方形、規模29m以上、方位東西(2)、に分類される。立地では、Aが同時期の集落と同じ時期と位置にあり、B～Eは集落の後に同じ場所に造られている。方向はA～Cが北西でD・Eが東西となり、規模では他の遺跡の例からみてもDが特に大型となる。方位と規模ではA・Bが同じ規定のもと造られ、

D・Eでは新しい規格のもと造られているが、この変化の間にCがあることが考えられる。特に築造時期については、B→Eが古墳時代前期で、変化としては、A→B・C→D→Eの順が考えられ、同一の墓域内での変容の画期として、集団墓として画一的なA・Bを中心に、集団の中で大きさや方向にやや違いが出始めるCを経て、特に規模が大きく方位など明らかな変化のあるD、さらに前方後方形が導入されたEとなっている。ただし周溝墓群の中でもDとEは少数であることがうかがわれることから、小島・柳原道跡群においては、A・Bの規格を基に、D・Eといった集団の中で特別なものとして新しい規格のものが後出し、同時期に存在していたことが考えられる。

周溝墓が現時点で確認されている範囲は直線で2kmあまり、遺跡が立地する自然堤防の大きさからみても、ほぼこの範囲の中で納まるものと考えられる。同じ範囲には集落が展開し、弥生時代中期～後期を中心に平安時代までみられるが、集落の中心は弥生時代中～後期までで、古墳時代前期以降、特に平安時代では自然堤防の西側など限られた位置に小規模に存在するのみとなっている。周溝墓と集落との時期と位置関係からは、弥生時代中期の四隅切れ形の周溝墓群は、同時期の集落と隣接した位置にあり、その間には正確な範囲などは不明であるものの環濠の存在が示されている。古墳時代前期からは弥生時代中・後期に集落域であった範囲に方形周溝墓群が造られており、集落域から墓域へと変化していく様子がみられる。

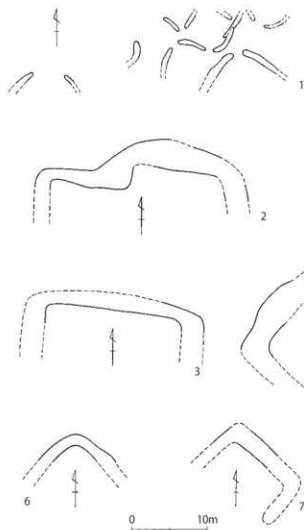


図11 小島・柳原道跡群周溝墓 (1:500)

表4 小島・柳原道跡群周溝墓

No	道跡名	形態	全長 (m)	溝幅 (m)
1	水内堂一元神社道跡6	方形	5-7, 10前後	0.4-2.0
2	水内堂一元神社道跡6	前方後方形	28以上	1.6-4.0
3	中塚道跡	方形	24-25	1.9-3.0
4	中塚道跡1	方形	16-17	2.8-4.0
5	宮西道跡	方形	20	2.3-5.1
6	宮西道跡	方形	10	1.1-1.6
7	水内堂一元神社道跡10	方形	13.3	1.8-2.3
8	小島塚道跡	方形	9.6	1.0-1.5
9	水内堂一元神社道跡10	方形	—	1.8

※道跡名の番号は、図3の道跡番号に対応する

ふりがな	こじまやなぎはらいせきぐん なかせぎいせき
書名	小島・柳原遺跡群 中堰遺跡
副書名	長電小島分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第155集
編者名	遠藤恵実子
編集機関	長野市教育委員会文化財課 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL：026-284-0004 FAX：026-284-0106
発行年月日	2020（令和2）年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
中堰遺跡	長野県長野市 大字小島字 岡田堰南 383番 外	20201	B-002	36° 39' 39"	138° 15' 01"	2019.12.4 ～ 2019.12.28	101㎡	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中堰遺跡	集落 墓域	弥生時代 後期		住居 2軒 土坑・ピット		弥生土器 磨製石斧 磨製石鏃		
		古墳時代 前期		方形周溝墓 1基		土師器		
		平安時代		溝 3条 土坑・ピット		土師器、須恵器		
要 約	<p>自然堤防上に位置する集落遺跡で、縄文時代と弥生時代中期から平安時代の遺構と遺物を確認した。</p> <p>遺構は弥生時代後期の住居2軒と古墳時代前期の方形周溝墓を1基、平安時代の溝3条、このほか土坑を確認した。周溝墓は溝部分と内側のコーナー部分を2箇所検出し、規模は約24mと大型のもので、周辺遺跡においても同時期の周溝墓が広い範囲で造られている。</p> <p>平安時代では、遺物が他の時期よりも少なく、集落が展開しない場所であることがうかがわれる。</p>							

長野市の埋蔵文化財 第155集

小島・柳原遺跡群

中 堰 遺 跡

令和2年3月19日 印刷

令和2年3月31日 発行

発 行 長 野 市 教 育 委 員 会
編 集 文 化 財 課 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
印 刷 大 日 本 法 令 印 刷 株 式 有 限 公 司